

10 ボランティアファンド学生チャレンジ賞（育成・支援プログラム）

10.1 ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2016 助成企画

本学には、「大学公式グッズの購入」を通じて社会に貢献する仕組みがある。

「明治学院大学ボランティアファンド支援グッズ」を購入すると、本体価格の10%（一部の商品は5%）が「明治学院大学ボランティアファンド」に積み立てられる。このファンドを原資とし、明学生の主体的なボランティア活動を支援するのが「明治学院大学ボランティアファンド学生チャレンジ賞」（通称「ボラチャレ」）である。

この本学独自の支援事業は2007年度に開設、しくみがユニークで学内外からも高い評価を得ている。これまでに50件以上の企画が採択されたが、昨年度は応募数が1件にとどまった。このままでは大きな意義を持つ同賞が衰退してしまうため、今回、企画の見直しをおこなった。

「何かやりたい」「活動を支援してほしい」と考えている学生たちは多い。彼らへ情報を提供し、また、応募しやすい環境を整えることで学生たちの力になることができるのではないか。それらを考慮し、以下のとおり変更した。

2016年度のコンセプト：応募件数を増やし、明学のボランティア活動の活性化につなげる
実現のための工夫：

1) エントリーしやすい部門の新設

これまで応募ができなかった単発イベントを対象にした「スタートアップ部門」を新設（助成上限3万円）。従来のものは「ジャンプアップ部門」とした。

2) 募集要項・応募書類の改訂

応募にあたり、どのような情報が求められているのか、記入例も含めて学生にわかりやすく提示することで、応募自体へのハードルを下げた。企画立案経験のない学生にもチャレンジしやすい機会とした。特に「スタートアップ部門」は応募書類の簡素化を目指した。

3) 審査方法の変更

公開審査会を取り止め、センタースタッフが丁寧にヒアリングすることで、応募書類に書ききれていない学生の「やりたいこと」をキャッチし、支援対象（助成企画）につなげられるようにした。

4) 広報活動の強化

従来の学内イントラネット「ポートヘボン」やボランティアセンターウェブサイト、SNSを通じた広報に加え、多くの学生が利用する食堂に三角ポップを設置し、「ボランティア」というワードに特に関心のない学生層にも周知した。また、全教員にも募集要項を配布し、学生への周知を依頼した。

5) 助成団体への支援

ガイドブックを新たに作成し、学生に手渡すことで、活動をおこなううえでの注意点や、どのような書類提出が求められるのかを明確にした。また、学内施設借用を代行したり、企画の広報を支援したりするなど、学生たちがボランティアセンターに来室しやすい環境を整備し、センター全



横浜キャンパス食堂に設置した三角ポップ

体として学生たちを支援している。

「ボラチャレ 2016」は「社会課題にチャレンジ！」をテーマに募集した。書類審査・面談を経て 11 のプロジェクトが採択され、2016 年 12 月 20 日（火）におこなわれた奨励金授与式では、各受賞団体に奨励金が授与された。2017 年 9 月末日までそれぞれの企画が実践される。

●2016 年度助成企画【スタートアップ部門】

プロジェクト名	団体名
戸塚原宿フリーマーケット	明治学院大学ボランティアセンター 横浜地域活動
情熱だけで、どこまでできるのか？	舞台企画 Passion
民族言語保護	渡辺充ゼミ

●2016 年度助成企画【ジャンプアップ部門】

プロジェクト名	団体名
教室でできる！発達障害児への支援を考えようプロジェクト ～未来の小学校教員へ伝えたい私たちの気づき～	教育発達学科 小林ゼミ
未来ワタシ委員会 vol.7	学生有志団体 Link up
DO FOR DOGS in 明学	MG ハロードッグ
GV (global village)	ハビタットエムジュー HabitatMGU
小学校読み聞かせプロジェクト	おはなしポップコーン
明学防災プロジェクト	ワイ Wゼミ学生
シリア人と日本人の相互理解促進委員会	てんげん 転原バンドゼミ
The Class for CCC (Communication, Cooperation & Confidence)	The Place for Children かわさき

10.2 ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2015 活動報告

2015 年度の募集は「社会課題にチャレンジ！」をテーマとし、以下のプロジェクトが採択された。

●2015 年度助成企画

プロジェクト名	団体名
学生による災害復興支援活動の指針を伝承する冊子の作成	明治学院大学ボランティアセンター 「Do for Smile@東日本」プロジェクト 明学・大鶴町吉里吉里復興支援プログラム

◇「地域に寄り添った復興支援活動の行動指針～つながりを大切に～」の作成

プロジェクト名	学生による災害復興支援活動の指針を伝承する冊子の作成
団体名	「Do for Smile@東日本」プロジェクト 明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム
企画の目的	① 継続的な復興支援活動によりもたらされた成果と課題を社会に広める ② 今後立ち上がる復興支援活動への行動指針の提唱をおこなう ③ 今までの活動を振り返ることで、学生が復興支援活動に携わる意味を再認識する

実施概要

東日本大震災が発生し5年が経過するなかで、中心的に活動をおこなう学生の世代交代や、日々の活動に追われることにより、これまでの活動を振り返る時間を十分にとることができていなかった。また、これまでの活動で何が達成でき、何が達成できていなかったのかを見直し、社会に向けて発信していく必要があると考えたことから、冊子の作成をおこなった。この冊子では、これまでの活動を振り返り、自己評価をするとともに、第三者の立場の専門家の方からの意見も伺い、客観的にも活動の見直しをおこなった。そしてこれから発生すると予測される災害における復興支援活動の「指針」となるように作成した。



感想・活動を通して得た学び

冊子の作成過程の議論の中で「つながり」というキーワードが浮かび上がってきた。地域との「つながり」、先輩から後輩へと受け継がれる「つながり」、わんぱく広場や学習支援という活動の「つながり」、というように私たちの活動がさまざまな「つながり」を形成してきたこと、そしてその「つながり」があったからこそ、これまで活動を続けることができたという大切なことを実感することができた。

冊子を作成するにあたって、「これまで活動してきたからこそ書ける、私たちが伝えたいこと」を意識した。それぞれ漠然とした思いは持っていたものの、その言語化は容易なことではなかった。議論を重ね、ようやく辿り着いた「つながり」というキーワードは私たちの共通する概念となり、地域への感謝の思い、これまでの活動の積み重ねについて改めて考えさせてくれた。冊子の作成のためにおこなった多くの議論は、私たちがこれまでおこなってきた活動の意味を明確にし、課題や良かったことを見直すことで今後の活動をよりよくするためのヒントにもなったと思う。

今後に向けて

復興支援活動において、求められているニーズは常に同じであるわけではない。地域の方の声を聞き、今何が求められているのかを常に考える姿勢が大切である。この冊子ではそのような学生の「気づき」により、ニーズに応えるべく活動が変化していったプロセスを中心にまとめている。この冊子を読んでもくれた人たちにとって、「地域の方の声を聞くことの大切さ」への気づき、さらに「地域に寄り添った復興支援活動の指針」となってくれたら嬉しい。

(学生メンバー 心理学部心理学科)